

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	熟練看護師による災害時に備えた自己導尿指導の実態：教育観の内容分析				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	佐藤 理乃
	研究分担者	所属・職名	名古屋市立大学医学部付属 みらい光生病院 泌尿器科・教授 ／福井大学学術研究院医学系部門 看護学領域 基盤看護学 ・特別研究員	氏名	青木 芳隆
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	佐藤 理乃

講演題目	陰部洗浄に関する文献検討
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>当初、排尿ケアの中の自己導尿患者に対し、通常時から災害時に備えた十分な情報提供ができる体制構築を目的とし、災害時に備えた自己導尿教育がどの程度臨床現場でなされているのかの実態を把握していく予定であったが、今年度は第一段階として、災害時の陰部の清潔保持に焦点を当て、Research Questionを陰部洗浄時に必要なお湯の量とし文献検討を行った。</p> <p>研究方法は、文献検討(医中誌 Web、Google Scholar)により実施し、Key Wordsは陰部洗浄とした。調査期間は2024年4月1日～2024年10月4日までの期間とし、分析方法としてテキストマイニング分析などを実施した。</p> <p>結果は、医中誌 Webにて200件の論文が該当し、そこから本文閲覧可能かつ原著論文のみを抽出し、64件が対象文献となった。そこから更に精読し、Research Questionに該当する論文5本を対象とし分析を行った。分析の結果、陰部洗浄に必要なお湯の量、すなわち何か効果を発揮したと記載されていた湯量を文献から計算した結果、必要な湯量は388mlであった。また、効果としては、便・尿・細菌・恥垢などの減少が報告されていた。</p> <p>洗い流す効果をもたらす水の量は平均すると383mlであったが、多くの文献は洗い流す水の内容に着目しており、水量に関して詳細に検討された文献は存在しなかった。程島ら(2022)は、使用材料的側面における効果は一様ではないと報告している。これらのことから、水の量の検討また、水の内容量の検討は必要ではないことが考えられる。更に近年は陰部洗浄用スワイプシートの波及もあり「水で洗い流す」という概念自体が日本人文化に根付いた思考(森、1992)から発生した Research Questionであることも考えられる。よって、今後継続し陰部洗浄における水の量による効果を明らかにしていくことは、必要性として低いことが今回の文献検討から導き出された。</p>